

# 農業技術情報

2025年6月4日

ゆとりみらい21推進協議会指導部会

十勝普及センター十勝東部支所 015-572-3128  
JA幕別町 0155-54-4118  
JAさつない 56-2131  
JA帯広大正 64-4591  
日甜幕別原料事務所 54-2756  
幕別町農林課 54-6605

## ★各作物の生育・作業の遅速（幕別町：6月1日現在）

（ ）内は平年値

作物名	遅速日数	生育および農作業状況	生育期節
秋まき小麦	遅3	草丈 66.1 (66.5)cm 茎数 798 (815)本/m <sup>2</sup>	止葉期 5/23 (5/23) 出穂始 6/2 (5/30) 出穂期 6/- (6/1)
馬鈴しょ	遅6	植付期 5/8 (4/26) 植付終 5/16 (5/7)	萌芽期 5/30 (5/24)
大豆	±0	は種期 5/16 (5/15) は種終 5/23 (5/20)	出芽始 5/26 (5/25) 出芽期 5/27 (5/27)
小豆	±0	は種始 5/13 (5/15) は種期 5/23 (5/21) は種終 5/29 (5/26)	出芽始 5/31 (5/31) 出芽期 6/- (6/2)
菜豆		は種始 5/28 (5/24) は種期 5/31 (5/30)	
てん菜(移植)	遅4	草丈 11.5 (14.0)cm 葉数 10.4 (11.5)枚	
てん菜(直播)	遅5	草丈 4.4 (5.8)cm 葉数 3.2 (4.1)枚	
牧草	±0	草丈 73.3 (72.5)cm	
飼料用とうもろこし	遅3	草丈 12.8 (16.3)cm 出葉数 3.2 (4.0)枚 は種期 5/13 (5/11) は種終 5/21 (5/19)	出芽期 5/23 (5/21)
ながいも(マルチ)		植付始 5/19(5/13) 植付期 5/24(5/19) 植付終 6/-(5/27)	
たまねぎ	±0	草丈 18.6(17.9)cm 生葉数 3.5(3.2)枚 葉鞘径 5.3(5.3)mm	

## 畑作

薬剤使用にあたっては、各部会や販売先等の基準に従ってください。

薬量および倍率は基準内に抑え、薬害やドリフトには十分注意してください。

### <秋まき小麦>

「きたほなみ」は出穂期がやや遅れています。出穂以降の最も重要な管理は赤かび病防除です。防除適期を逃さないよう、ほ場観察に努め計画的防除を行ってください。

### 1 秋まき小麦の出穂期以降の窒素追肥

「きたほなみ」の出穂期以降に葉面散布で窒素追肥を行う場合は以下に注意して行いましょう。高タンパクにならないよう注意します。

(1) 尿素を使用する場合は 1.0～1.5%液を計3回散布します。

- (2) 過去に高タンパクだった場合は葉面散布を控えてください。
- (3) 高温時の散布は葉やけの原因になるので避け、原則夕方の散布とします。また、尿素濃度を 1.0%程度まで下げるなどしましょう。

## 2 赤かび病の防除

赤かび病は開花時期に最も感染しやすく、多湿条件で多発します。1回目の適期は開花始期(図1参照)ですが、開花始に雨天の恐れがある場合は、出穂揃から防除します。**出穂にばらつきが目立つ場合は、ほ場内の生育が早い部分に合わせて1回目の防除(開花始)を実施し、2回目以降の薬剤散布でほぼ全ての穂が薬液で保護されるように計画的な防除を実施してください。また薬剤の使用回数には十分注意してください。**

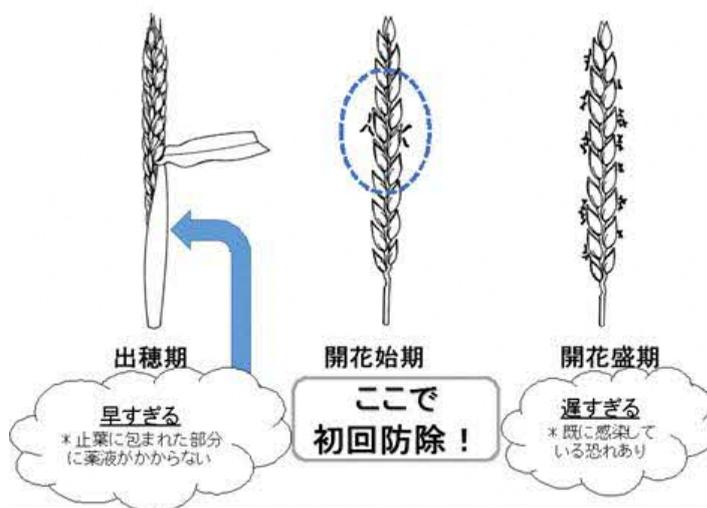


図1 赤かび病の1回目防除時期

臨機で 4 回目の防除(チルト乳剤)が必要になることが予想される場合、耐性菌の産生を防ぐため3回目の薬剤は別系統の「プライア水和剤」等を選択します。

表1 小麦赤かび病防除体系例

防除時期	農薬名	RACコード※2	使用濃度(倍)	使用時期	回数(以内)
1回目(開花始)	プロラインフロアブル	3	2,000	収穫 7 日前まで	2回
2回目(1回目の7日後)	ミラビスフロアブル	7	1,500	収穫 7 日前まで	2回
3回目(2回目の7~10日後)	バラライカ水和剤※1 または プライア水和剤	M4・3	500	収穫 14 日前まで	2回
		10・1	1,000	収穫 21 日前まで	2回
臨機	チルト乳剤25	3	1,000~2,000	収穫 3 日前まで	3回

※1バラライカ水和剤は、硝酸カルシウムと混用する際は下記の順で混用下さい。

①バラライカ水和剤 → ②硝酸カルシウム (物理性の問題のため)

※2農薬の耐性・抵抗性の発達を防ぐため、作用点や作用機構から各農薬の有効成分を分類したものが「RACコード」です。

「RACコード」が同じであれば、有効成分が異なっても同一系統の薬剤となり、連用となるので注意しましょう。

## 3 アブラムシ類・ムギクロハモグリバエの防除

今年はアブラムシ類の発生が早く、既に町内広範囲で確認されています。ほ場を十分に確認して、薬剤防除の要否を検討しましょう。

また、ムギクロハモグリバエの産卵跡や食害痕が確認されたらスミチオン乳剤で同時防除可

能です。

【アブラムシ要防除水準】出穂 10 日後頃に半分以上の穂でアブラムシが観察される。

表2 アブラムシ類防除例

害虫名	農薬名	RAC コード	使用濃度 (倍)	使用時期	回数 (以内)
アブラムシ類	ゲットアウト WDG	3A	4,000	収穫 21 日前	3回
	スミチオン乳剤	1B	1,000	収穫7日前	1回

※スミチオン乳剤はアワヨトウ・ムギキモグリバエに登録有り。

【ムギクロハモグリバエ要防除水準】止葉を含む上位2葉の被害葉率(被害が葉身の1/2程度に至った葉数の割合)で防除の要否を判断する。

防除が必要な被害葉率:秋まき小麦で 16%以上、春まき小麦で 12%以上。

## <てん菜>

### 1 中耕

- (1) 土壌の膨軟化と地温の上昇及び透水性の改善と畦間の除草のため、「カルチ」「畦間サブソイラ」などを早期に施工し、生育促進を図りましょう。
- (2) 中耕の深さは根の広がりを考慮し、次第に狭く深くなるようにして、畦間が茎葉で覆われる時期まで数回実施しましょう。
- (3) 中耕時、株元まで土を寄せると根腐病の発生を助長するので注意しましょう。

### 2 除草剤散布

- (1) 除草剤散布のポイントは適期処理にあります。気象条件や土壌水分等を考慮し、生育と雑草の発生に応じ、遅れないように注意してください。
- (2) 直播栽培は移植栽培と登録基準が異なるので注意しましょう。
- (3) 直播栽培の初回散布時期は雑草発生始～発生揃(てん菜本葉2葉期)で、は種後 30 日前後が目安になりますが、てん菜の葉齢が進んでいない幼小個体では生育が抑制される場合があるため、注意が必要です。

### 3 アブラムシ・ヨトウガの防除

移植栽培におけるかん注処理の持続効果は 40～45 日間程度です。薬剤の持続期間を考慮し、間隔を空けすぎないように防除を実施しましょう。6 月 15～17 日を目処に散布してください。

表5 アブラムシの防除例

病害虫	薬剤名	RAC コード	使用濃度(倍)	使用時期	回数(以内)
混用	アブラムシ	9B	6,000	収穫7日前	3回
	ヨトウガ	28	5,000～6,000	収穫前日	2回

## 4 根腐病防除の実施

根腐病は高温多湿で蔓延しやすいので発生前に防除しましょう。特に連作、短期輪作、排水不良など多発が予想される場合は、6月上中旬と7月中旬の2回防除を実施しましょう。その際、耐性菌を発生させないため同系統薬剤の連用は避けてください。直播栽培ではモンセレン顆粒水和剤のかん注処理を行っていないので根腐病防除を行いましょう。

表6 根腐病の防除薬剤例（株元散布）

薬剤名	RACコード	使用濃度(倍)	使用時期	回数(以内)	10a当水量(L)
ミリオネアフロアブル	7	4,000	収穫7日前	4回	100
アミスター20フロアブル	11	1,500	収穫14日前	3回	200

### <ばれいしょ>

#### 1 中耕・培土

「カルチ」・「畦間サブソイラ」等により土壌の膨軟化と地温の上昇を図り、通気性や透水性の向上に努めましょう。

##### 《慣行培土の注意点》

- ・晴天の午前中に行うと効果的ですが、土壌水分が低いと培土が崩れやすく、緑化の原因になる場合があるので、適度に水分がある時期に実施しましょう。
- ・土壌が過湿状態の時に行うと、土を締め過ぎるので注意しましょう。
- ・培土作業が遅れるとストロンを損傷し、塊茎数の減少や肥大の妨げとなるため、着蕾期(平年6/11)までに最終培土を終えましょう。

#### 2 除草剤

土壌散布は萌芽前までです。一年生イネ科雑草の茎葉散布については次表を参照して適切に散布してください。

表7 ばれいしょ除草剤(対象:一年生イネ科)の使用基準(例)

除草剤名	使用時期	10a当薬量	回数(以内)	注意事項
ポルトフロアブル	イネ科雑草3～8葉期 (収穫前日まで)	200～300ml	1回	イネ科雑草が完全に枯死するには5～10日を要する。
ナブ乳剤	イネ科雑草3～5葉期 イネ科雑草6～8葉期 (収穫前日まで)	150～200ml 200ml	2回	効果の発現には2週間程度要する。
ワンサイドP乳剤	イネ科雑草3～8葉期 (収穫前日まで)	75～100ml	1回	イネ科雑草が完全に枯死するまで2週間程度を要する。

※上記3剤はいずれもスズメノカタビラに効果が劣る。

#### 3 病害虫防除

##### (1) 疫病

平均気温 15℃以上(最適気温 18～20℃)、多湿条件で多発します。次号より掲載する疫

病発生予察情報を参考に防除してください。

## (2) ナストビハムシ・アブラムシの防除

林地や防風林の近くで多発しやすいので注意しましょう。ナストビハムシは成虫による葉の食害だけでなく、幼虫によるイモの表面や内部に至る糸状食入痕の被害により、食用・加工用では商品化率が低下します。成虫や葉の食痕を確認したら防除を行いましょう。成虫防除は幼虫密度を低下させます。

表8 ナストビハムシを中心とした防除例

害虫名	薬剤名	RAC コード	使用濃度 (倍)	使用時期	回数 (以内)
ナストビハムシ アブラムシ類	ゲットアウトWDG	3A	2,000~3,000	収穫7日前	4回
	モスピランSL液剤	4A	4,000	収穫7日前	3回
	アクタラ顆粒水溶剤	4A	ナストビハムシ:2,000 アブラムシ:3,000	収穫14日前	3回

※ナストビハムシ成虫の発生盛期(6月上旬)に7~10日間隔で2回実施する。

## <豆類>

### 1 除草剤の散布

例年、散布適期を逸したり、除草剤散布後の降雨などの影響で、薬害による生育遅延が散見されます。豆類の生育や雑草の発生状況を確認し効果的な散布に心がけましょう。「パワーガイザー液剤」は有機リン系殺虫剤や他の除草剤との10日以内の近接散布は薬害の恐れがあるので避けましょう。\* 薬剤使用例は5/19号参照

### 2 中耕

除草剤の残効を考慮し、地温の上昇と除草のため中耕を実施しましょう。除草のための中耕は、日中の暖かい日が効果的です。

### 3 大豆「わい化病」・菜豆「黄化病」(ジャガイモヒゲナガアブラムシ)の防除

山間部やほ場周辺に牧草地がある場合は、被害の拡大が懸念されます。クルーザーを使用していない場合は、出芽揃から初生葉展開期に1回目の防除が必要です。その後2回目の防除を1回目の7日後頃に行いましょう。また、クルーザーを使用している場合についても、は種後1か月を目処に防除を行いましょう。\* 薬剤例は5/19号参照

### 4 金時のかさ枯病

低温・多湿条件や機械管理作業で蔓延します。予防防除としては、子葉展開期から10~15日間隔で銅剤を2回処理します。発病株は速やかに抜き取るとともに、治療効果もある「カスミンボルドー(銅剤)」による防除を実施してください。

表9 かさ枯病防除例

病害名	農薬名	RACコード	使用濃度(倍)	使用時期	回数(以内)
かさ枯病	ドイツボルドーDF	M1	500	—	—
	コサイド 3000	M1	1,000		
	カスミンボルドー (銅ペーパーシン水和剤)	24・M1	1,000	収穫 30 日前	3回

※「粉衣用ペアーカスミンD」と「カスミンボルドー(銅ペーパーシン水和剤)」は合計の使用回数を3回以内とする。

## 野菜

高温少雨の気象条件で【コナガ】や【ネギアザミウマ】の発生量が多くなります。ほ場を確認し必要に応じた対策を実施してください。

### <病害虫発生予察情報(6月)>

全道病害虫発生予報情報(6月)についてです(北海道病害虫防除所発生予察情報より)。

#### (1)あぶらな科野菜

コナガ(予報) 発生量:多

6月のコナガの発生量は【多】と予想されています。ジアミド系薬剤(RACコード28)の感受性低下を予防するために、本系統を含む薬剤の使用は、コナガ1世代あたり1回以内に行ってください。

#### (2)たまねぎ

ネギアザミウマ(予報) 発生期:早 発生量:多

初発の対策が重要のため、ほ場を確認し必要に応じた防除を実施してください。

白斑葉枯病

白斑葉枯病は、まとまった降雨のあと7日間は発生の可能性が高く、特に平均気温 18℃以上の温暖な日に初発する可能性が高くなります。

べと病

べと病は、気温が 20℃以下で高湿度条件が続くと発生しやすくなります。蔓延が早いいため、発生しやすい条件下では特に予防が重要となります。

### 周辺作物への飛散(ドリフト)防止の徹底と農作業安全

- ・作物の成長も進み農薬散布の機会が増える時期です。農薬散布に際しては風向きに注意し周辺作物への飛散防止に努めて下さい。
- ・農薬を使用するときは必ずラベルの安全基準や注意事項を確認して下さい。
- ・農薬は必ず保管庫に入れ、カギは必ずかけて下さい。
- ・使用した農薬容器や袋は、適切に洗浄や処分して下さい。
- ・農薬散布の際は、マスク、防除衣、ゴム手袋、帽子、防除用メガネ、長靴、肌を覆うタオルを身につけ、しっかり安全対策をとって下さい。
- ・作業機連結時の挟まれ事故、機械昇降時の落下事故などに注意して下さい。